

虚子選青畝選紫峽選の違い

やまだみのる[2017-11-14 13:30]

はじめに

ややこしいタイトルでごめんなさいね。小難しい俳句論を説くつもりは全くなく、気楽なコラムとして読み流していただけたら幸いです。

高浜虚子先生の選

虚子先生の選は受けたことがないので人づての話ですが、添削して採られるということはまずなく、ただ丸印がつくだけだったと聞きます。当然ながら印のつかないものは没です。

当時のホトトギス虚子選はとても厳しく、一句でも入選すれば赤飯を炊いてお祝いするくらいだったそうで、なんとかして虚子選に入選するべく、みな必死に勉強されたのでしょうか。

句会の席上、入選句のよいところを説明されることはあっても、没句の欠点等に触れられることは皆無であったそうです。

阿波野青畝先生の選

青畝先生の場合は、未熟な作品を添削して採っていただきました。ただ添削してくださる作品の傾向は、はっきりしていたと思います。

類句類想はいうまでもなく、世俗的で陳腐な題材や言い尽くされた月並みな視点の作品は、たとえそれが合格レベルのものであっても決して入選することはありませんでした。ただし、「私の場合は」と補足しておきますね。

なので、私は、青畝師にぶつける作品は、先生に挑戦するという気持ちで、いつもホームランか空振りの三振かという冒険句を投稿するようにしていました。

当然ながら圧倒的に三振が多いのですが、ごくたまに、年に数回程度入選したときの喜びは、それこそホームランを打って万歳三唱の気分でした。

ことばの魔術師といわれた青畝先生の添削には、ただただ唸るばかりで、たった一文字でたちまち佳句に変貌するさまは、実に圧巻でした。

どちらが正しいのか

なおしてまでは採らない虚子選。作者の捉えた感興が確かであれば添削して採る青畝選。

その是非を論じることは愚かだと思いますが、ホトトギス系の指導者は、概ね虚子方式を継承しておられるように思いますし、当然ながら青畝師に傾倒された指導者は、青畝方式に近いのではと、私は感じています。

作者の個性を育てるという点を重視するなら虚子方式がいいのかもしれませんが。青畝方式の場合、指導者が自身の作風を超えて幅広い選ができなければ、指導者のコピーのような作家ばかりになってしまいます。ただ、単期日のうちにある程度のレベルにまで育てるのであれば青畝方式の方がよいということになるかと思えます。

小路紫峽先生の添削指導

私の先生である紫峽師についても触れておきます。ゴスペル俳句の指導方針＝紫峽師の指導方針だと言えるからです。

結論から言えば、紫峽先生の指導は、青畝先生のそれとほぼ同じです。紫峽先生ご自身、青畝師の作風や理念に近づくべく努力していると常々言われていたからです。

ただ添削で作家を育てるという紫峽先生独特の指導方法と指導力は、青畝師はもちろん、他の多くの著名作家の方も一目を置かれ認められていました。不思議なご縁で先生の特訓を受けることができた私は、ほんとうに幸せ者でした。その恵みを独り占めするのは申し訳ないので、紫峽先生に教えていただいた多くのうち、そのエッセンスをみなさまにご紹介しておこうと思えます。

※添削の区分

返ってくる添削稿は、朱書きで真っ赤になるほどのときもありましたが、基本的には、◎か没かのどちらかです。「報告、説明、何のことなるや」という厳しいご指摘はありましたが、「△もう一息、要再検討」などという扱いは一切ありませんでした。直すべき点は具体的に添削して採ってくださいましたからです。

そのかわり、一度没になった作品の練り直しは厳しく戒められました。そんな時間があるなら一句でも多く詠みなさい…と。

俳句の世界では、どちらが先に詠んだかなどという醜い類想論が絶えませんが、作品の一句一句に執着せず、駄目なものはダメと切り捨てる潔さも作家としての大切な要素だと考えられたからだと思います。

※自選の訓練

句会での選句や自選を疎かにする人は大成しない、ということをよく言われました。披講のときにその人の選を聞いていると、おおよその実力がわかる…とも。

これは、先生に指示されて始めたことではないのですが、添削稿を書く前の下書き段階で自選で順位をつけ、自信のある順番に並べて添削用紙に書いて送りました。

初めの頃は、自分の選の基準というものがいかに不甲斐ないものであるかかということに自覚させられるばかりでしたが、あながち的外れではなかった…という傾向が見られ始めたときの喜びは格別でした。後日、先生にそのことを申し上げると嬉しそうに苦笑いしておられました。

句会するときにも、自分が予選として抜き取った作品がどのくらい選者の選と合致しているかというのをいつもチェックしていました。

選者選が披講される時、自分の作品が読み上げられるか否かだけに関心を注ぎ、他の人の作品が披講されるのは馬耳東風という姿勢の人もごくたまにいらっしゃいます。じつにもったいないですね。

こうした努力をすればすぐに効果が上がるというものではなく、単にそういう意識で望んでいたというだけのことなのですが、日々の積み重ねは必ず報われると信じていました。

※添削で学ぶ心がけ

最近、テレビ番組「プレバト」で俳句がとりあげられるようになってから、無料添削の希望者が激増しました。夏井いつき先生の巧みな話術と添削の妙で俳句の面白さを知られた方が、これなら自分にもできそうだと、挑戦してみようというということで申し込んでこられます。

じつに感謝なことなのですが、俳句はことばをひねって作るもの、つまり「ことば遊び」と勘違いされて、頭の中で考えて練り上げただけの作品を送ってこられるのです。残念ながら大半が没になります。そして、そのことに気づかれる前に「何だつまらない」と挫折されるパターンがとても多いのです。

けれども、これは誰もが通る道なのです。いま、ゴスペル俳句で活躍されたり、卒業されて他結社で活躍されておられる方も、みな一度ならずそういう壁を体験しておられますし、紫峽先生の訓練を受けていた頃の私もまた例外ではないのです。

つまり、そうした難所を忍耐して前進していかなければ、本物の幸せな俳句ライフを見出すことはできないのだということを理解して頑張ってもらいたいのです。

最後にひとこと

俳句作家として生活を維持しようというのではなく、たかが趣味の世界、そこまで厳しく難しく考える必要はない。仲間と一緒に楽しい吟行や句会ができればそれで十分。

はい、まったくその通りです。でも、究極は、何のために俳句をするのかということですよ。

これまで約20年間、ゴスペル俳句を推進してきた中で、経済的、時間的な制約、あるいは、病気の家族の介護などの諸事情で俳句どころではなくなってきたのでやめます…という方も沢山いらっしゃいました。とても残念です。

人生には乗り越えなければいけない苦難はいくらでもありますが、その不遇を宿命とあきらめて絶望感と戦うだけではあまりに虚しいと思いませんか。

言うは易しかもしれませんが、どんなに苦しくても悲しくても、愛と希望と勇気とが与えられていれば、人は乗り越えていけると私は信じています。ゴスペル俳句を応援して下さるみなさまには、そのような人生の支えとしての俳句ライフを獲得して頂きたいと切に願っているのです。

虚子先生は、俳誌玉藻の記事の中で、「俳句は究極は信仰」だと仰ったそうです。その記事に感銘を受けられた紫峽師は、聖書の次のことばを引用して、一作家、一指導者としての覚悟の程を手紙に書かれ虚子先生に送られました。

『信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を獲得しなさい』

自分の慰めのために信仰に頼むのは簡単ですが、信仰を貫くがゆえの迫害との戦いもあります。迫害に負けて信仰を捨ててしまうのではなく、戦いぬくことで初めて天国行きの切符を獲得できるのだよ。と、まあ、むかし教会学校の奉仕をしていたときに、中学生の子どもたちに向けてそんなふうにごこの聖書のことばをお話したことがあります。

虚子先生宛に書かれた手紙の内容はわかりませんが、人生の支えとなり伴侶となるくらいに俳句と関わるためには、それだけの覚悟で真剣に俳句と向き合う姿勢なくしては得られない…ということをご紫峽先生はおっしゃりたかったのではないかと私は思うのです。

楽をして得られる一時的な満足感と、努力を重ねて獲得できる本物の達成感とは、全く別物であるということ、ゴスペル俳句の根本理念はそこにあるのだということをご最後に言い訳させてください。

おわり